

# 「あま」のムラからの報告 (12)

— 阿波橋のあま —

歳 森 茂

## はじめに

あまとは海士(あま, あまし)及び海女(あま)を指し, 又, 「あまに行く」のように, 潜って採貝に従事することもあまと称している。徳島県では, あまの数は増加の傾向<sup>1)</sup>にある。潜水能力があり, 視力や健康に異状がなければ, 投下資本が少なくすみ, 高価なアワビ等が取れるあま操業は, 若い漁業者にとって魅力的存在である。あまを年中専業で行う者は少なく, 多くは釣り, 網漁等を他の時間又は他の季節に行っている。つまり年間の漁形態の一部にあま漁を取り入れている者が「現代あま」のほとんどであるといつてよい。

今回の調査は, 徳島県の海岸線中央部(図1)にある橋のあまである。橋町は阿南市に属する。ここではイサリの歴史は古いといわれるが, あま操業の歴史は浅く, あまの伝統のある同県の阿部(アブ), 伊島(イシマ)等と色々の点で異なっている。取材は, 昭和61年5~6月, 主として, 海士会会長の谷口成司氏, 長老の黒田重吉氏より, 又, 補足的に他の若干の海士より行った。

## 1. あま漁の経過・現状

ここは冬季の海水温が6~7℃に低下するといわれ, あまには不向きであったためか, 近年に至るまで, イサリ以外の採貝はみられなかった。昭和26年, 谷口成司(昭和18年生れ)は他の2名と共に, 当時出現したウェットスーツを着用してあま漁を始めた。これが橋におけるあま漁の始まりであり, 又, 徳島県におけるあま漁に, ウェットスーツが使用された最初の事例であるといわれる。その頃, 橋では, 一人一日, 30~50キロのアワビが取れていたといわれている。さて, 現在, 橋湾には, そのシンボルのように, 四国電力阿南火力発電

所の煙突が高くそそり立っている（写真1，2）。

橋湾では昭和31年から真珠養殖を始め、当時、この水揚げだけで5億円に達していたが、42年から工場誘致に伴う、第2回の埋立てが始まり、しゅんせつによる浮泥が湾内に充満して浮泥の海と化した。2，3年後はいくらか落ちついたが、波立ちがあるたびに、浮泥が浮上し、数日間は浮泥の海となっていた。これによって、ナマコを除いて、湾内の真珠、アワビ、サザエ、エビ等は壊滅するに至った。<sup>2)</sup>

昭和56年10月、谷口氏らは新たに10名を加え、13名の会員で海士会を結成し、栽培漁業に着目して、その活動を始めた。ここでは海女はなく、海士会員は男子のみである。海士会はアワ

ビ、サザエの放流（アワビ放流は56年以降、累計20mm：10万個、10mm：12万個、サザエは58年70キロ、59年130キロ放流）に努力し、アワビ稚貝放流はかなりの良い結果が出ている（収穫アワビの7割以上が放流もの）といわれる。特に海士会が力点を置いているのは、ナマコの放流であり、市価の高いアカナマコが画期的な増殖を示すようになった（図2）。その活動経費は、会員の負担金と奉仕漁獲金でまかなわれている。

ここの海士会規約の大きな特徴は、乱獲防止のための自主規制である。月間出漁日数を16日以内と決め、各自で出漁日と休漁日を自主的に決めている。し

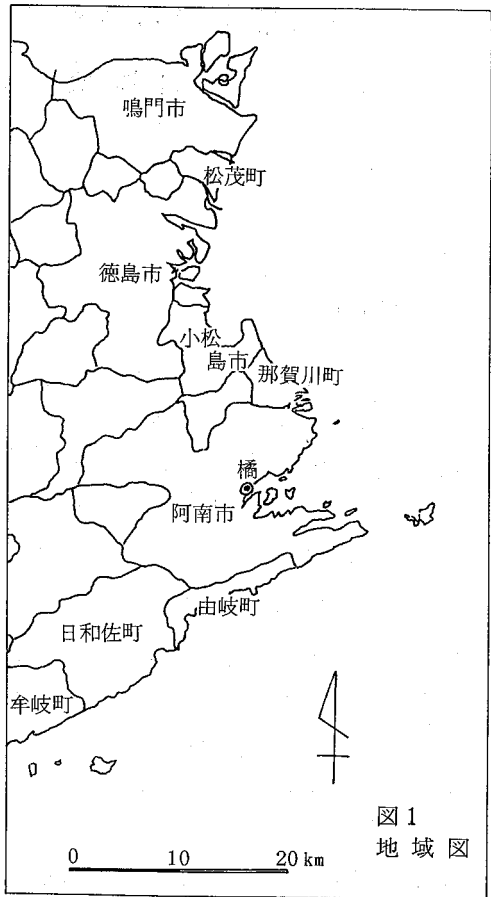


図1  
地域図

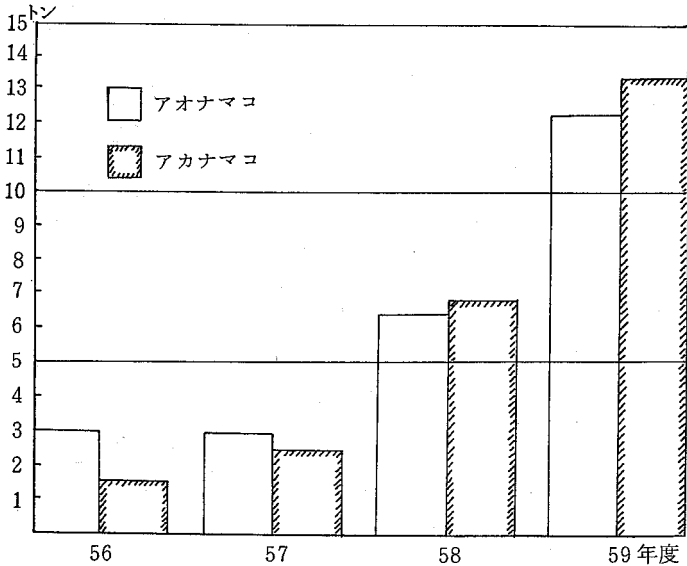


図2 橋漁協におけるナマコの漁獲実績  
(橋漁協資料による)

たがって一勢休漁日はない。又、一日の時間制限はない。アワビの口開けは2月1日、口止めは9月末日である。海士会入会規制は特になく、地元で年間3か月以上操業している者で入会希望があれば海士会に入れているという。又、アワビ、サザエの収量はつかめない。橋漁協資料によれば57年に6,868キロのアワビが入荷しているが、他の年は1, 2トン代である。これは地元の水産会社へ、個人がアワビを直接出荷するためである。又、ここには海士の海上信仰はないという。

## 2. あま用具

アワビオコシ ここではノミとはいわない。橋のアワビオコシは写真3及び図3に示す形のを皆が使っている。全長53.7cm(以下、cmを略す)、全重340gである。先端のおこす部分が広がっている。価格は1,000円位といい安い。図4は谷口氏の使っているもので、図3のものより5cm長く、反対に22g軽い。反りは7°である。価格は約2,800円。アワビオコシの使い方はサカノ

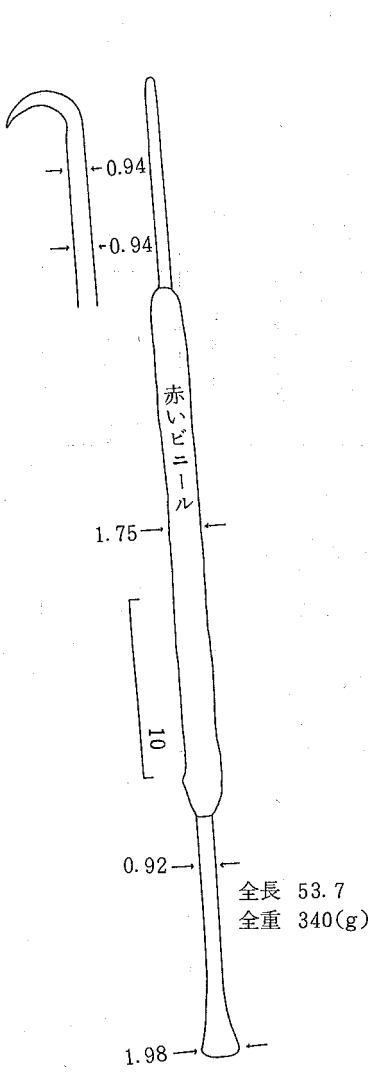


図3 アワビオコン (橘)

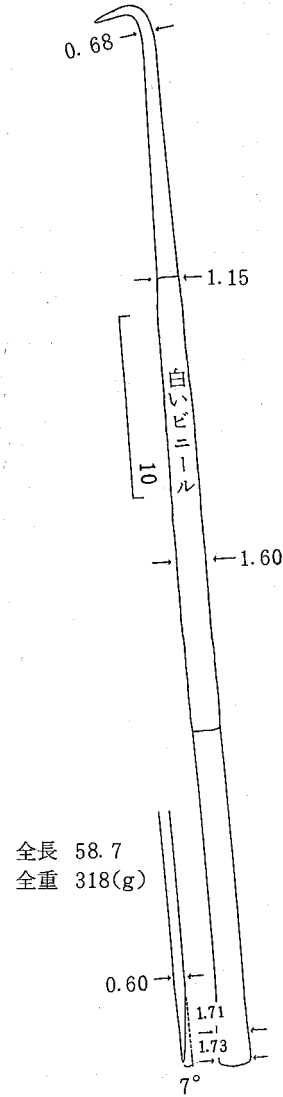


図4 アワビオコン (谷口氏)

ミの形を正常とし、その逆をサカノミとっている。ここではコノミは使わない。谷口氏のアワビオコシは白いビニールを巻いてある。これはアワビの取り残しがあって、息一杯の場合に、アワビオコシを下に置いてくるためといい、ここはアオサ（アナアオサ・緑色）が多いので、白いビニールを巻くと下でよく分かるという。

アワビのハカリ ここではイサリの人が古くから使っていたといい、あまもそれを使っている。ヒノキ又はベイマツで作る。全重90g、その形を図5に示す。今は海士会で作り、一つを2～3年使っている。サザエのハカリはステンレ

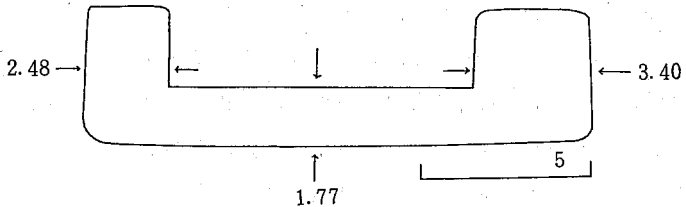


図5 アワビのハカリ (橋)

ス製、外径4.26、厚み0.36の円筒形で、全重158g、今年から使用している。

メガネ 黒枠のV型マスク、ウグイス色メガネ等を使っている。フクリン付きはなし。メガネはヨモギ、タバコ、液体スプレー等で磨いている。

タル ここではタルは使っていない。

ウェットスーツ 年間3着使う。坂田・阿南潜水より入れる。冬は8～9mmで、鉛2キロを10～12個着けている。ウェットスーツは家から着て出て、「もぐり」が終わると、そのまま家まで着て帰る。鉛は阿南潜水で買い、1キロのもの500円、2キロのもの1,000円という。

コシアミ 写真4に示す腰網を腹の前につけている。昭和26年以来という。これは袋の口の長さ27.0、奥行51.0、網目1.7であるが、袋の小さい人もある。そして太さ0.57のコシヒモと称するヒモで後ろに回して締めている。袋の口の外側のヒモはゴムを使い弾力性を持たせてある。この袋の大きさとサザエでもナマコでも20キロは入るといふ。手ダマはここにはない。

ハラタブ 熊本県天草郡五和町二江から転住してきた漁師、沖野順氏は、椿泊の池田氏<sup>9)</sup>と同期生であり、池田氏と同じように二江のハラタブを橋海域で

使ったが、<sup>あ</sup>箸にひっかかったときに危いといって、誰もまねをしなかった。沖野氏は一昨年から使用をやめている。沖野氏はハラタブは潮の流れの早いところでは効果はあるが、橘は潮の流れが緩やかなので、ここには向かないという。ヒバチ 1～3月、採爰のため、全員レン炭ヒバチを使っている。

### 3. イサリ用具

イサリを年間一カ月以上やっている人は6～7人といわれ、年輩の方が主である。イサリ漁には期限なく、年中いつでもできるが、アワビだけは、(あまの)口開けから口止めの間に限られている。イサリの人は朝が早く、夏は5～6時、冬は7時頃に船を出す。前報<sup>1)</sup>の日和佐町恵比須浜のイサリと同じように、冬は帽子をかぶり、カップを着用し、ひざの下にザブトンを使用する。昼食は弁当持ちで、やはり船の上で食べている。

箱メガネ 写真5に示すものは、黒田重吉氏(明治33年11月21日生れ、85歳)が5、60年の長年月使用していた箱メガネで、この写真を写した5月24日も、朝(息子さんが)イサリに使ったようで水にぬれていた。杉材で作られ、ガラス面の大きき42.4×30.0(cm)、水につける側の大きき43.5×33.1(cm)、高さ(奥行き)28.3(cm)である。水につける面の大ききを比較すると、ここのは恵比須浜のものより約28%広い。そして、その長辺と短辺の比をみると、不思議にも両者共1:0.76を示していた。又、大ききは違っても高さ(奥行き)はほぼ同じ(ここのが0.5 cm短い)であった。この高さ(奥行き)は船の水面からの高さに合わせてあるという。箱メガネは市販の新型は使い勝手が悪く、昔のまま(伝来のもの)のほうが使い易いという。それは、ここでは、箱メガネを水上へ下ろすと、写真5に見える上側の板部に額を押しつけて水面を押し、片手を添えて船べりに固定するように押しつけるため、杉材なら痛くないそうである。しかし、このため年輩者は額面が常人より固くなっているという。ガラスと材との接着部分の水洩れ防止には、白色のパテを使い、月に一回位貼り替える。

カナツキ 写真6、写真7がカナツキで、チヌ、アコウ、コチ、ヒラメ、カレイ等を突く。アワビにも使う。写真8は船の横板を岩壁に見たてて、そこに

へばりついているアワビを取る形を示したものである。カナツキを、石をけずるようにして下ろすと傷つかずに取れるという。

タモ カナツキで突いて落したアワビはタモですくう。写真9はサザエ、タモ用の小さいもので、網の直径10.02，針金の太さ0.40である。

アワビカケ 昭和30年頃、アワビを釣り上げることを考えた黒田重吉氏が色々苦心して開発したもので、その形を写真10及び図6に示す。これはハガネを

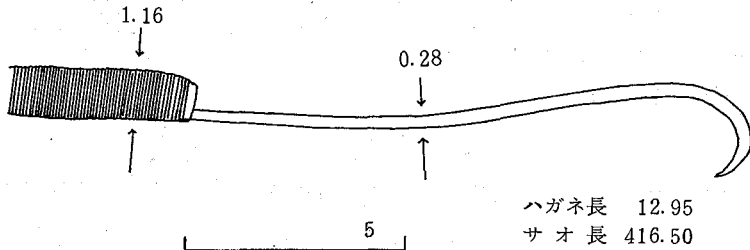


図6 アワビカケ (橋)

自分で叩いてヤスリですってペンチでえがめたものといい、アワビカケの名をつけている。橋ではこれを6人位が使用している。アワビカケはアワビの足の先のギザギザ、ピラピラした部分(「上足部」)を刺すので、後でアワビが死ぬことはなく、アワビに刺さると、そろそろ上げて、船に入れ、タモは使わない。時には写真11に示すように、一番外又は二番目の呼水孔へかかって上ることもあるという。殻の薄いほうからかけるが、アワビの向きによっては、横からや、殻の厚いほうからかけることもある。写真12はアワビカケの使い方を示したもので、写真13はその使い方を説明している黒田重吉氏である。サオは女竹(めんだけ)を10月に切って使う。「昔は(水が澄んでいたので)8ヒロもいけよかったが、今は2ヒロ半か3ヒロだ」という。古くは竹2本の元口をポーターでつないだ。現在の黒田氏のアワビカケのサオは元口の太さ1.86, 末口0.70, 全長416.5である。黒田氏は箱メガネでのぞいて、アワビが4~5個固まっている場合、最初に取りの个体以外は、アワビカケで殻を叩いておく。叩くと岩にしがみついているが、そうしないと一つを取っている間に他のアワビに逃げられてしまうという。

なお、参考までに、東北地方のアワビ鉤を載せてみた(図7)<sup>4)</sup>が、黒田氏のアワビカケとはかなり形が違うようである。

#### 4. あま用語に関して

あま漁の歴史が新しいだけに、橋にはあま用語は数少ない。少ないというのも、又、一つの特徴である。まず、アワビの名称であるが、クロアワビをオン又はクロといい、メガイをメン又はアカといいメンは時にヒラカイといっている。クロとアカ、オンとメンは、どちらも同じ位に使っていると地元の橋水産はいう。傷具については特に名称はない。傷具はここでは売らないという。一般にアワビの漁期の終をロどめ又は口閉めといっているが、ここでは口止めである。又、海女がないこともあってオカアマの用語はない。阿部では貝とはアワビを指し、アワビを取りに行くことを「貝取りに行く」というが、ここでは単に「アワビを取りに行く」といっている。アワビを取りに潜ることを、県内他産地では「かつぐ」、「抜ける」、「泳ぐ」などというが、ここでは単に「潜りに行く」という。又、アワビが岩にしがみつくことをオコルといっている。アワビを岩からはぐことを、単に「アワビを取る」といっている。自分のよく取る穴場をスといい、「自分のスがあるから・・・」という。又、トビツ(米びつのこと)ともいう。「自分のトビツを大事にする」そうである。ちなみに、石川県の舳倉島ではコメビツ<sup>5)</sup>といっている。アワビのハカリ(殻長が9cm以上あるかどうかを見る)を県内他産地では、スン、スンドリ、スンイタ、スイタ等というが、ここでは単に「アワビのハカリ」である。アワビの目方をかけることは採貫とはいわず、チギにかけるといっている。牟岐東では漁協の事務関係者などをオカビトというが、ここでは一般の人を指し、「オカビト」と「漁師」に分けている。又、上記のように、ここでは1~3月、レン炭ヒバチを採媛に使って、これをヒバチといっている。橋の南にある橋泊<sup>8)</sup>ではヒバチは使わない。伊島<sup>3)</sup>ではヒバチを使っている。さらに南に

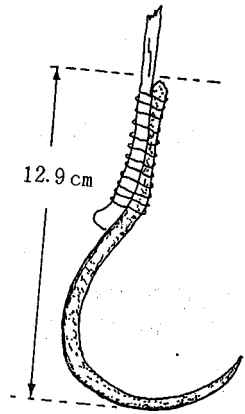


図7 岩手県のアワビ鉤  
(岩手県水試1960原図)<sup>4)</sup>



下がると阿部,<sup>6)</sup> 日和佐<sup>1)</sup>では使い、牟岐東<sup>1)</sup>では以前は使っていたが今はやめている。そして、阿部以南ではヒドコと称している。ヒバチとヒドコはどこが境界であるか見定める必要がある。

海士会では、長島の南側に54年からアワビ稚貝を放流し、禁漁区を設定していたが、59年2月、この禁漁区に大瀧漁協海士グループ(7名)を含めた20名が、9日間奉仕出漁してサザエ約2トン、アワビ150キロを水揚げ、総額169万円の収益を得て、会の事業資金にあてている。この行為は、以前は「ひきあげ」<sup>7)</sup>(徳島県の他地方では「おしあげ」という)といったものであるが、ここでは奉仕漁獲金<sup>2)</sup>の語を使っている。その他、「海がなごい」、「はんば日和」などは、阿部と同様に使われている。

### おわりに

今まで、あまのムラにふさわしいムラを次々と報告してきた。今回は新興アワビ産地ともいえる小規模の組織を調べた。ここにもムラ意識、ムラとしての連帯は生まれ育っている。本稿に挙げた出漁制限、奉仕漁獲金等の他に、共同体としての規約は多く、違反に対する罰則もある。徳島県では、一つのあま集落では、ほとんど皆同じノミ(又はアワビオコシ)を使う習慣があるが、ここでも例外ではない。ムラ意識であろう。

農・漁業の近代化は、老人層の働く喜びを奪ったといわれ、農村ではゲートボール以外に老人の生甲斐のないところもある。漁村は違う。老いた人達は小船を操り、釣りに、イサリに、海を友として過ごしている。本稿で挙げたアワビカケも、一地方の、漁業としては効率的とはいえない技術かも知れないが、生きている優れた民具・技術の一つとして紹介することができた。

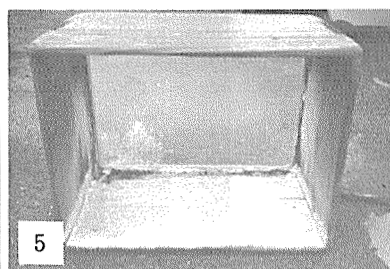
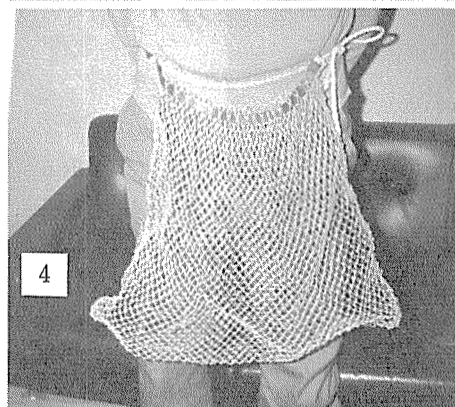
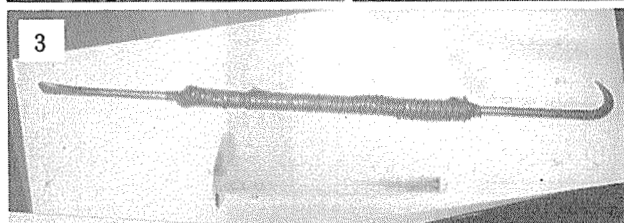
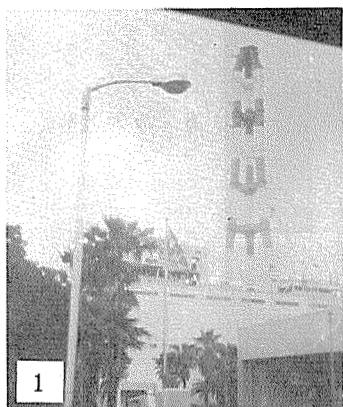
民間には、まだまだ世間に知られていない民具や技術が存在するものと思われ、老人達のご健在の間に、次々と掘り起こし記録する必要がある。

なお、本調査及び本稿作成にあたり、御多忙中を色々とお知らせし、御教示又は御協力頂いた沖野順、金野良一、黒田重吉、黒田貢太郎、小島博、條半吾、谷口成司、宮繁武司(50音順・敬称略)の皆様及び橘漁協の多くの職員に深謝する次第で

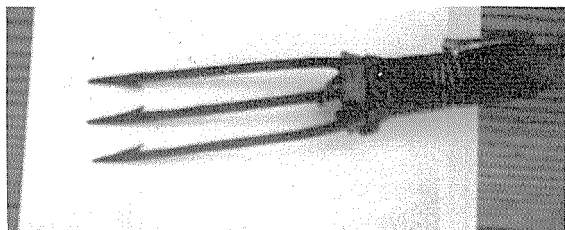
ある。

### 注 及 び 文 献

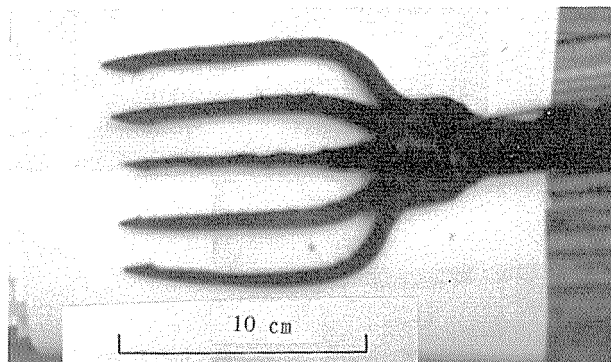
- 1) 歳森 茂 (1986) : 「あま」のムラからの報告 (1), 香川大学教育学部研究報告1 (68)
- 2) 谷口成司 (1985) : 橘湾のナマコ栽培漁業, 漁村, 51巻10号, P32~37.
- 3) 歳森 茂 (1986) : 「あま」のムラからの報告 (7), 香川大学教育学部研究報告1(66), P176~177, 180.
- 4) 岩手県水試編 (1960) : 採鮑採藻漁業, 岩手県の漁業の実相, P406による。
- 5) 「石川県郷土資料館 (1975) : 海士町, 舳倉島」の第2章第1節生業 (小林忠雄執筆) P28によると, 「海女が誰にも知られずに親から伝えられたり, 自分で発見した漁場のことをコメビツと称しているが, これはその場所へ行けば必ず米飯が食べられるという意味から出た言葉で, 秘密の漁場である」と記されている。
- 6) 歳森 茂 (1985) : 「あま」のムラからの報告 (3), 香川大学教育学部研究報告1(63) P22~23.
- 7) 條 半吾 (1984.6.26) : おしあげ, あわ文化財巡り (民俗), 朝日新聞



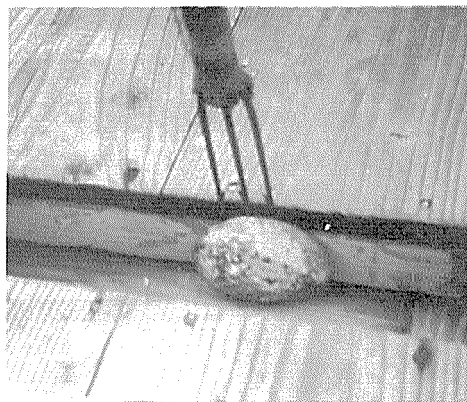
- 1 阿南火電の集合煙突（正門付近で写す）      2 その煙突の見える橋漁港  
3 アワビオコシ      4 腰網。口の外側のヒモはゴムを使い弾力性をもたせてある      5 ハコメガネ（向こう側がガラス面）



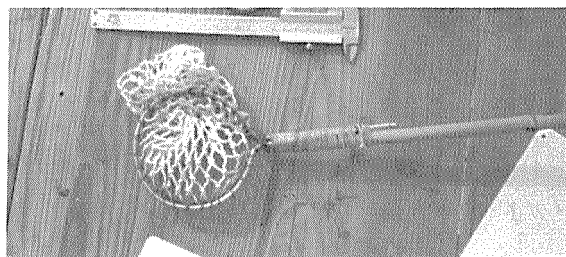
6 カナツキ



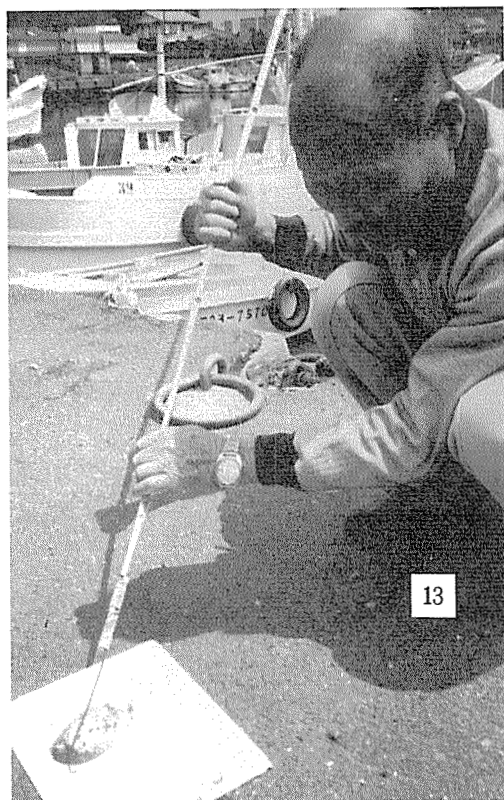
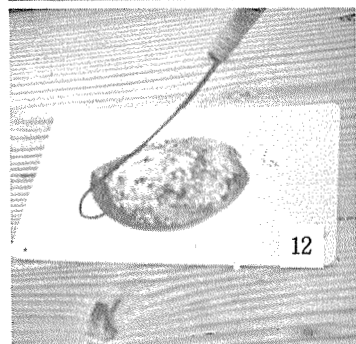
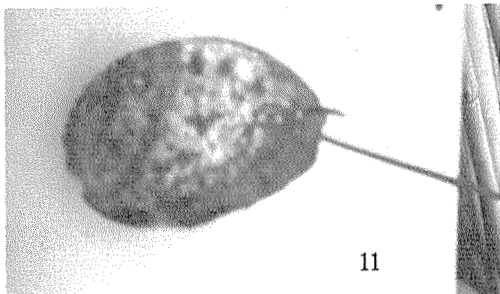
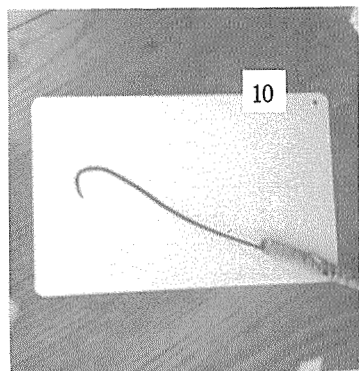
7 カナツキ



8 カナツキで  
アワビを取る  
形を示したもの



9 タモ  
(サザエ, タ  
コ用)



- 10 アワビカケ 11 一番外の「呼水孔」へかかった形を示したもの  
12 アワビカケの使い方を示したもの  
13 アワビカケの使い方を説明する黒田重吉氏